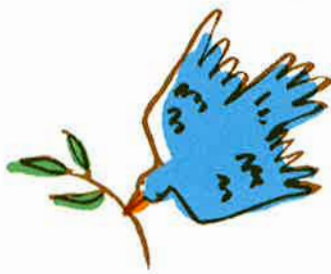


小さな命の育つ場にかかわりあいたい

絵本作家・鳥の巣研究者

鈴木 まもるさん

(下田市)



アトリエに並べられた
たくさんの鳥の巣

『父さんの子育て絵日記』をはじめ、子育てをテーマにした作品も手がけている鈴木まもるさん。現在は鳥の巣研究者として、ニューヨークで個展を開くなど活動の場を広げています。実は、鈴木さんの描く絵本と鳥の巣コレクションには、ある共通の思いが存在しました。鈴木さんが絵本や鳥の巣を通して発見したこと、伝えたいことは何なのか？ 下田市の山中にある一軒家、鈴木さんのアトリエを訪ねました。

薫ちゃん
がやってきた！

住み慣れた東京を離れ、伊豆半島・婆娑羅山(はさらかやま)の山裾に暮らし始めて18年。妻の文子さんは竹下文子のペンネームで活動する童話作家。『黒ねこサンゴロウ』シリーズをはじめ、夫婦で絵本を制作するなど公私ともに良きパートナーです。山の暮らしに慣れた3年



目、文子さんが男児を出産。小さな命の誕生に「赤ちゃんつて、かわいい。小さいなあ」と思いました」

赤ちゃんの命名に「男の子だったらかおる、女の子だったらじゅんにしようと思っていた」と笑う鈴木さん。「薫ちゃん」という名前には「男の子だから、男っぽく、強い男にならなくちゃいけないとか、僕はそういうことにとられたくないなと思っていました。いかにも強そうな名前が悪いつてわけじゃないけど、そういうこととはなるべく離れたところで生きていられるように」と、鈴木さん自身の願いが込められていたのです。

お父さんが描く
子育て絵日記

文子さんの出産後、鈴木さんは「おっぱいをやる」以外の育児・家事を手伝いながら、薫ちゃんの成長記録を描くようになります。「一日の出来事を大学ノートに綴っていた妻に代わって、僕が書くようになったのがきっかけです。最初は文章で書いていたけれど、やはり僕は絵が好きでだんだんと絵

の割合が増えていきました」。父親の育児参加が言われはじめる前のことで、「妻も自分の仕事があるし、お互いできることをやってきた」と話す鈴木さんにとつて、家事や育児をするのは自然のことでした。

「子育ては毎日が発見！ 自分がヒマだったということもあるかもしれないけど(笑)、子どもが成長していく姿がおもしろくて、描くのが楽しみでした。子どもが寝た後、パパッとその日頭にしみついたことを忘れないように描くんです。何気ないしぐさやたわいのないことでも僕にとつてはうれしい、大事なことです。写真もいっぱい撮ったけど、絵はその時の何かしらの気持ちや思いが、ちよつとした線に現れる気がします」

こうした薫ちゃんの2歳3ヵ月までの記録を二冊の本にまとめ出版したのが、『父さんの子育て絵日記』です。

赤ちゃんはクロッキーのモデル向き、誰にでも描けると言つて笑いますが、「描く場所や道具にこだわらなくても、自分の描きたい思いをしっかりと持っていれば良い作品として残るんだと改めて思いました。育児はこうでなきゃいけないとか、難しいことは描いてな



くて、『うちと同じ』と安心したり、『こんなこともあるんだね』と共感してもらえたら……。子どもってかわいいんだよ、おもしろいんだよと伝えたい」

偶然見つけた古い鳥の巣にひかれて

「日常の中の、自然な行為の積み重ねで出来たものが好き……」と話す鈴木さんには、絵日記と同じように大切にしているものがあります。ある日、山で草刈りをしていた時、偶然見つけた古い鳥の巣。今では、160種400個ほどの鳥の巣コレクションになりました。ヒナが巣立った後の鳥の巣は、やがて雨や風で自然にこわれてしまうもの。最初は、どうして鳥の巣にひかれるのか

わからなかったと言います。しかし、気になって観察したりするうちに「形は違うけど、絵本も鳥の巣も同じなんだって気がついた。絵本って、大人が自分の子どもや小さな子どもも育っていく

時に見せるものでしょう。鳥の巣も大事なヒナが育つ場。僕が絵本を描きたい、鳥の巣に興味があるっていうのは同じ気持ちなんだ！小さな命の育つ場にかかわりたいからだと……」

同じ種類の鳥の巣でも都会と田舎では材料が異なります。「自然素材で作る田舎の巣に比べて、作り方は同じでも都会の巣はビニールやゴミを使っ



子育て絵日記「みんなあかちゃんだった」

て壊れやすい。でも、親は人目につかないところで必死で巣を作るんです。メジロやスズメなどよく見かける鳥の巣でも、そこに卵が産まれて、そこでヒナが育ったと思うと……僕にとっては

みんな大事」と静かに思いを語ります。そんな伊豆の山で出会った鳥たちを題材に絵本『鳥の巣みつけた』を出版後、こんなことがありました。「僕が描いたオオルリを見て、野鳥に詳しい人が『こんな茶色の鳥はオオルリじゃない』って言ったんです。鳥の図鑑に載るのはたいていオス。どちらかというとオスの方が色がきれいで目立つからでしょうか。でも、僕が描いたのは巣作りをしているオオルリのメス。巣作りをするのはメスだけなんです。オオルリのオスはきれいな青色だから、僕が描いた茶色のメスがわからなかったんでしょね」オスがきれいな色をしているのは、メスが安心して卵をあたためられるように、自分に注意を引きつけるためなのです。

「オスばかりもてはやされているけど、それぞれが大事な仕事をする。巣

のことは見れば、メスの大切さがよくわかります。あ、でも、オオルリのオスはヒナにエサをやるんですよ。オスもいればメスもいる。僕は正しい自然を描きたいし、伝えたい」

僕が伝えたいこと

時は流れ、絵本の中の薫ちゃんも14歳。「彼は彼なりの世界をつくっている。小さな頃から日常的に絵日記を見たり、一緒に山で鳥の巣を見つたりしましたが、それらを通して命の大切さを感じてくれていたのでは……。将来のことはまだまだこれから。今は学校の部活動で忙しいけど、たまに家事を手伝ったり、料理を作ったりもします」

大学で陶芸を専攻したが、売るための作品作りが性に合わず、絵本や鳥の巣という好きな方向へ自ら進んだ鈴木さんは、薫さんに対しても「その子自身を持っているものを大切に」と見守ります。

絵本『鳥の巣みつけた』の物語の最後は、こんなふうには結ばれています。

「世界でいちばんたいせつなこともそだてるために」

そのことには、小さな命の育つ場にかかわりたい、絵本や鳥の巣を愛する鈴木さんの温かなメッセージが込められています。

男らしくでも 女らしくでもなく 自分らしく

静岡市立清水興津小学校教諭

石田 美紀子さん

(静岡市)



静岡県では、男女の平等という視点から平成十年に男女混合名簿が導入されていますが、その後、子どもたちを取り巻く状況はどのように変わってきているのでしょうか。日頃から教育実践を重ねている清水興津小学校教諭の石田美紀子さんを訪ねました。

四年生担任の石田さんのクラスで、道徳の授業が行われていました。子どもたちはみんなリラックスした表情。子どもの輪の中に溶け込んで、すぐに見えなくなってしまうような石田さん。だれもがおりのまま、自然体でいられる、そんなクラスの雰囲気伝わってきます。

「普段の生活全般の中からジェンダーを考えていくことが大切」と考えている石田さんは、どのような思いでどのよう子どもに接しているのでしょうか。



ジェンダーとのかかわり

「私自身は、姉妹の中で育ち、男だから、女だからといった教育を受けた記憶はありません」。そんな石田さんも、就職前後から女だからという言葉に耳にしたり、不都合を感じたりするようになりました。

教育現場でのジェンダーのあり方を考えるようになったのは、十三年前の教職員組合の研究分科会から。そのころは名簿も男女別で、男女混合名簿の運動を進めていた時代でした。

かかわった当初の分科会名は「女子

教育問題」。それが「男女の平等と自立」に変わり、男女を平等にする学校教育について考えました。しかし、学校現場の中では受け入れられない部分もたくさんありました。そして、分科会名は現在「両性の自立と共生」に。

自分らしく 自分の道を 生きていけるために

「共生というのが一番大事じゃないでしょうか」。人と人が力を合わせながら生活をしていくこと。それには、男だから女だからということではなく、人として生きていくということが基盤になります。

以前なら、「男のくせに」「女のくせに」と言ったところをジェンダーという視点だと、「男でも」「女でも」というふうに言ってしまうがちです。でもこれは子どもに逆のジェンダーを刷り込むことにもなりかねません。男女に関係なく「自分らしく自分の道を生きていく。それが自立ということだと思いません」。

たとえば、男の子に多いプロ野球選手になりたいたいという夢。実現のためには、体作りなど色々なことを自分で考えていく力をつけることが大切です。そのためにも、栄養や調理、食材の安



全性のための環境作りなど、一般的には女性が担当することが多いと思われる分野にも、関心を広げていくことが必要になります。男女に関係なく、世の中全般に関心を持つ必要性は同じなのです。

何を大切に生きていきたいのか、その基本となるものを教えること。それを石田さんはテーマにしています。自分に自信がもてる、満足できること。そして学校でできるのは、自分を大切に生きる環境を作ること。それはどの学年であつても変わりません。

でも、今の子どもは、自分に自信が

もてない子が多いと感じている石田さん。「私が同じ年頃るときより、ずっと知識も度胸もあり柔軟なのに。そんなに期待しないで、と言ってくるのです。昔の子どもは運動会の前の日は、みんな日記に一番になりたい、などと書いてきたものなのですが……。できなくていいから、自分もそんなに捨てたものじゃない、くらいに、自分に自信を持つてほしいですよ」。それにはもちろん、男だからできない、女だから無理などとも思つてほしくない。「自分はこうしたい、と考えてほしいのです」

子どもの希望を、 尊重して接する、 そこから自分も 教わることも

今の小学校では、呼び名を男女にかかわらず「〜さん」に統一するところが増えています。しかし、子どもの気持ちや尊重することが大切と考えている石田さんは「呼び方は、四月の自己紹介のときに子どもたちになんと呼んでほしいのか、呼称も含めて聞いて、希望のまま呼んでいます。あだ名の子もいますよ」。

やはり女の子は〇〇ちゃん、男の子は〇〇くんが多く、刷り込まれているのでは、とも思いますが、そういうふ



うに育つてきて、親しんでいるからだろうと納得することに。

しかし、「呼び名については、自分の中でも何が一番いいのかまだ答えの見つからないところ。それでも、子どもは柔軟なのでちゃんと使い分けはできていますよ」と子どもの柔軟さに感心する石田さん。

また、石田さんのクラスでは、係の仕事や分担を自分のやりたいことで決めます。

九月の宿泊体験活動の係活動分担も、自分の実力を発揮できるものを選ぼうという方針で決めました。その結果、保健係は女子ばかり、レクリエーション係はほとんど男子。すると、最後に全体のバランスを見た子どもから、「このままでいいの？」との声。どの係にも男女の視点が入ることが必要だとわかっているのです。

「こうやって、子どもたち自身が考えていくという作業が大事じゃないかと思えます。最後に見直して全体としてこれでもいいのかと、四年生で、もう考えることができるんだと、逆に私が勉強になりました。子どもはこちらが思う以上に、今何が必要か、何が大事かをちゃんと考えています。子どもに教えるというより、教わることの方が多いですね」

今、 大人がすべきこと

今大人は、私たちが抱えている問題を先送りしていることが多い、後始末を子どもに任せてしまっていると石田さんは感じています。

環境問題や男女平等の問題もぐちで終わりがち。それでは大人自身が自分たちの問題を解決していないということです。「もっと自分自身を振り返らないと、子どもたちがいメッセージを送れないのではないのでしょうか」

「まずは大人も、自分の人生・生活を楽しむ方法を考えること。子どもたちもきつとそこから感じるものがあるはずですよ」。そう話して微笑む石田さんの生き方から、きつと子どもたちも多くのものを感じ、学んでいることでしょう。

子どもが自由に創作できる場所を作りたい



アトリエ「カラーポケット」

清水 裕泰さん

(沼津市)

「もっともっと、時間をかけて夢中で取り組める場所を子ども達のために作りたい」
自由に創作しながら、いろいろなことを試すことができ、大人は子どもが安心して取り組み
るように見守ってあげることがモットーにしたアトリエ「カラーポケット」(開設は平成十四年)
を主宰する清水裕泰さんに話を聞きました。

創作活動を楽しむ 子ども達

「カラーポケット」の扉を開けると、
にぎやかな子ども達の声が聞こえて
きます。

部屋には、モール・牛乳パック・色
紙・クラフトパンチ・輪飾りの折り紙・
毛糸等、数え切れないほどの画材が所
狭しと並べられています。その中で、
壁に張った模造紙にローラーで色を塗
っていく子、リースを素敵に飾りつけ
ている子、みんな夢中で思い思いの世
界を繰り広げています。

アトリエで好きなように創作する子
ども達の顔からは、ワクワク感が伝わ
ってきます。

「アトリエのモットーは子ども自身
が帰る時は笑顔で“なんですよ。自

養護学校で学んだこと と夢の実現

由に絵を描いたりものをつくったり、
ここで思いっきり楽しんで、過ごして
欲しいと思うんですよ」

清水さんは、以前養護学校で教諭を
していました。学生時代には心理学を
専攻し、その視点を生かしてさまざま
な子ども達と接してきました。

養護学校で訪問教育を担当した時。
自分で身体を動かすことができない生
徒を支援しながらコミュニケーションを
とろうとする時、かわり手の気持ち
の硬さが伝わると、生徒にもそんな雰
囲気が伝わり、緊張してしまうことを
感じました。仕事を終えて一日を振
り返ると、生徒から教諭自身が存在を
確かにしてもらっているんだと感じる
んですよ」



平成十年に養護学校から普通学校へ研修交流のために異動。その間に子どもとかかわる上での視点を広げたいという気持ちから「アトリエを開くための指導者養成講座」を受講。平成十三年の三月に「チャイルドアート・インストラクター」の資格を習得しました。

三年間の研修を終え、養護学校に戻った清水さん。子どもの発想や表現をそのまま受け止めてみたい、結果だけではなくて作っている過程そのものも認めてあげたい、という気持ちから学校という枠を離れて「子ども達の創作活動の場所作りを実現したい」という思いが募っていく、それが「カラーポケット」開設につながりました。

家庭での清水さん

清水さんは、葦山で養護学校の教諭をしている妻の恵美子さん、小学校二年生の彩紀さんの三人家族です。

彩紀さんは学校からアトリエに帰宅して、清水さんと勉強したり、絵を描いたりして過ごすのが、日課になっています。

恵美子さん曰く「父親と濃く過ごす時間がたくさんあることは、彩紀にとっても夫にとっても大事であり、貴重なことだと思っておりますよね。」

「僕も、妻の帰宅が遅い時は夕食の支度もするんですよ。近頃は子どもと一緒に分担しながらできるので、台所に立つのも楽しみの一つになってきたんですよ」と、家事を彩紀さんと楽しむという清水さんの笑顔が印象的でした。

みんなで共に学ぶ

子どもが絵を描いたり創作活動に取り組む時の形には、さまざまなものがあります。「カラーポケット」には、月二回、三歳から十二歳までの子ども達がワイワイと作品作りをしながら、仲間や仲間の作品に関心を寄せて成長しています。

「作品作りの時間を共有しながら、作品のなかに見られる工夫や良さを素直に認めあうことで、子どもたちは自然に“互いを尊重する気持ち”を養っていくと思います。」

自然体は自由体

世間では一般的に男の子色、女の子色という固定色のような見方がありますが、清水さんは「子ども達は、自分の好きな色遣いで自分に合う色を選んでいきます。社会に受け入れられやすいという”大人の帰属意識”から社会の共通イメージを子どもに押しつけてしまうのかもしれないけれど、その子の選んだ色には子どものメッセージが込められているので、まずしっかりと受け止めてあげることが大切じゃないのかな。そして親も子どもと共に過ごす時間を通して、その子を受け止め、温かく見守ってあげること

で、子どもが安心感やつながり感を体感することで子どもの自由な発想をのばしていけるのではないかと思います」と、子ども達の未来に希望を託します。

